

1990年度

プレ冬合宿・冬合宿
報告書

プレ冬合宿：後立山・五竜～唐松
(11/23-25)

冬合宿：北アルプス 唐沢岳～緞鬼～北燕
(12/22-1/2 : 敗退)

信州大学山岳会

目次

ブレ冬合宿行動記録 : 3

冬合宿行動記録 : 4~9

係の報告 : 10~11

個人の反省 : 12~17

作文 : 17

もろすの

春



あ
レ

1957 年 12 月 20 日 (H.T.)

アレ冬合宿行動記録

11月23日 遠見尾根、大遠見山まで

9:20: ギンドラ終了点(雪) - 13:50: 大遠見山TS

11月24日 五竜岳ピストン

Fix隊: L 浦山、加藤、河西、橋口、藤江 - 五竜岳にFix工作7P

本隊: L 兼岩、以下8名

7:15: TS発(快晴) - 10:00: 五竜山荘TS (テント設営後五竜ピストン

- 12:45: 五竜頂上(快晴) - 13:50: TS(快晴)

五竜の斜面は雪質が悪いと雪崩そうである。

11月25日 唐松岳、八方尾根下山

Fix隊: L 小久保、牧野、長谷川、植垣

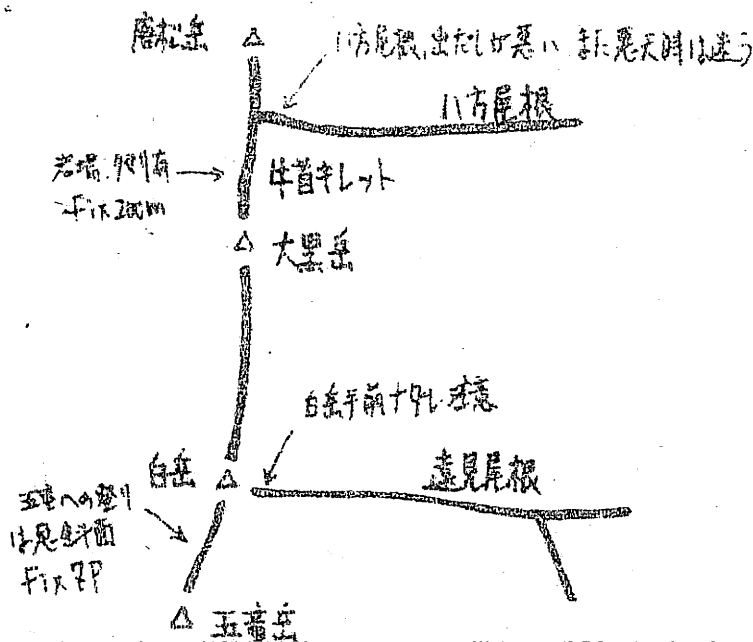
本隊: L 兼岩、以下9名

6:40: TS発(晴) - 10:40: 唐松山荘(晴) - 11:00: 唐松岳(曇)

- 11:40: 唐松山荘発 - 15:05: ギンドラ駅

大黒岳～唐松山荘間にFix隊が張り、八方尾根の出だしに1P。大黒岳～レットは悪点時、ルートファインディング注意。岩がもろくハーケンがききに

大変雪の少ないアレ冬であったが、アイゼン歩行の良いトレーニングにはな
思う。



冬合宿行動記録

まず初めに私たちが、今回の冬合宿において、計画書記載外の行動をとりまし
とを報告します。これは1991年1月1日より東嶽鬼岳～有明山～中房温泉ま
日の行程でエスケープをしたものでありますが、次の理由からこの行動を行いました

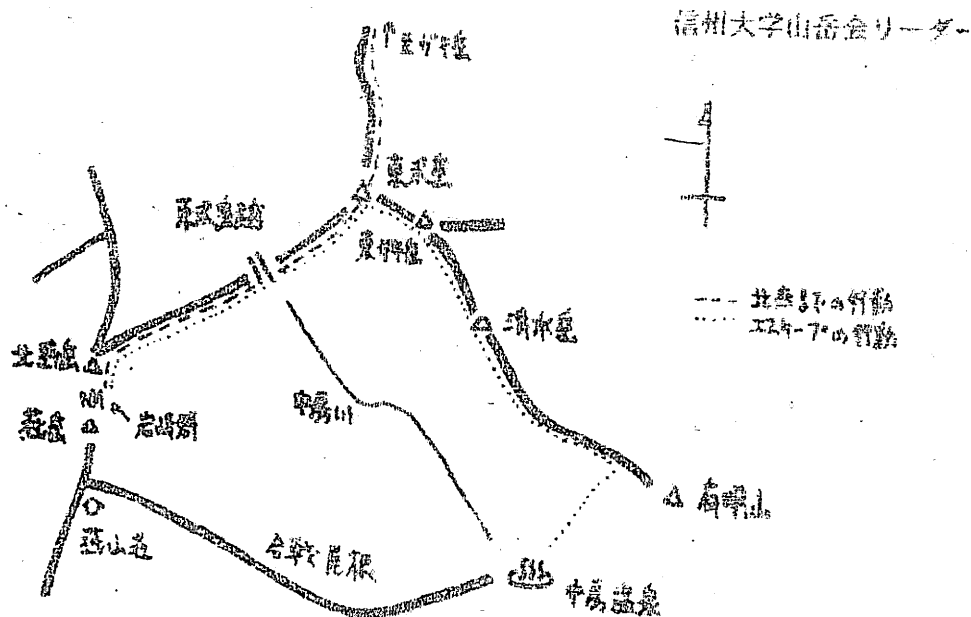
記

1. 1990年12月31日(晴)北嶽岳先の岩峰群の通過が不可能であると判
2. 翌1月1日より、天候が悪れることが天気図より明らかであった。
3. 予備日が残り少なく(最終下山日は1月4日)、速やかにエスケープをする
があった。

以上1、2、3の理由からエスケープを決定しましたが、そのルートについても
2月31日東沢乗越にて以下の判断で決定しました。

記

- A. 計画書記載の東沢乗越から中房川怪山は雪の状況から雪崩の危険がある。
- B. 往路下山は現状で不可能
- C. 東嶽鬼～有明の稜線は藪こぎはありそうだが、明瞭な尾根でエスケープルー
使えそうであることをここまでの縦走中に目撃する
- D. リーダー部員の内2名が有明山から中房までの夏道をかつてトレースしてい
このルートを使えば残りの予備日内に中房温泉まで安全に下山できそうであ
以上1、2、3、A、B、C、D、Eの判断で計画書記載外の行動をとりまし
因は事前の計画段階での調査、研究の不足が挙げられ、このことについての反省
個人の反省”の項に譲りますが、今後は計画段階での綿心の注意を払い、2度!
ような不始末を繰り返さぬように努力いたします。



12月22日 高瀬ダムに入山、唐沢岳西尾根 1895m地点までデボ上げ。

6:50:七倉発(晴れ) - 8:30:高瀬ダム上T.S(晴れ)

上部偵察隊: L小久保、松下、植垣、兼岩

6:50:ダム発 - 12:30:2080m付近(T.S発見) - 12:50:本隊と合流
本隊: L浦山、以下10名でデボを進める。

9:45:テント設営後ダム発 - 13:00:1895m地点に閉装デボ - 15:00:T.S

唐沢岳西尾根の取り付きはダム上のトンネル入口横のハシゴより行う。100m程東電の歩道があり、そこから左にルンゼを見ながら尾根筋を上がる。明瞭ではないが露跡在り。傾斜は強弱が繰り返し、1700mのJ.Pより一度左に大きく曲り、再び尾根へ戻る。強烈なシャクナゲ帯を突破し、デボ地へ。

デボ品: 食料10日分、ガソリン1.5l×12本、FIX具全部など

12月23日 全員で2080mのT.Sへ

6:20:T.S発(雪) - 8:40:デボ地(雪) - 11:30:2080mT.S(雪)

デボ地点でデボを回収しフル装備になると途端にペースが落ちる。昨日の偵察した2080m地点を本日のT.Sとする。2080m地点は傾斜がそこだけ水平になった所で樹林の向を縫ってスペースを確保する。小久保、牧野、河西で2280mピークからの下り口の偵察に行く。

12月24日 2パーティ行動で2400m地点まで

先発隊: L浦山、松下、加藤、長谷川、橋口

後発隊: L小久保、以下10名

7:25:全員でテント撤収後別れて出発(雪) - 14:00:2400mT.S着(雪)

2280m ピークは広いプラトー。下り口は樹林で分かりにくい。コルまでの下りは急な瘦せ尾根(FIX2P)。2140m コルは瘦せていてT.Sにはならない。コルをすぎると、尾根は広くなり樹林の中のラッセルとなる。尾根筋を外さぬようルートをとる唐沢岳手前のニセピーク直前からシャクナゲ帯となり、これを突破しニセピークに出ると眼前には荒涼とした唐沢岳が控える。ここから先は岩と雪の瘦せ尾根でフィックスが必要と思われ2400mの幕営可能地まで引き返す。

12月25日 唐沢岳直下まで(一日晴れ)

FIX隊: L小久保、牧野、植垣、加藤、兼岩、藤江

7:00:T.S発 - 9:10:唐沢岳 - 唐沢岳下りのルートを探す(FIX30+25mとデボを残す) - 15:00:FIX隊全員帰天

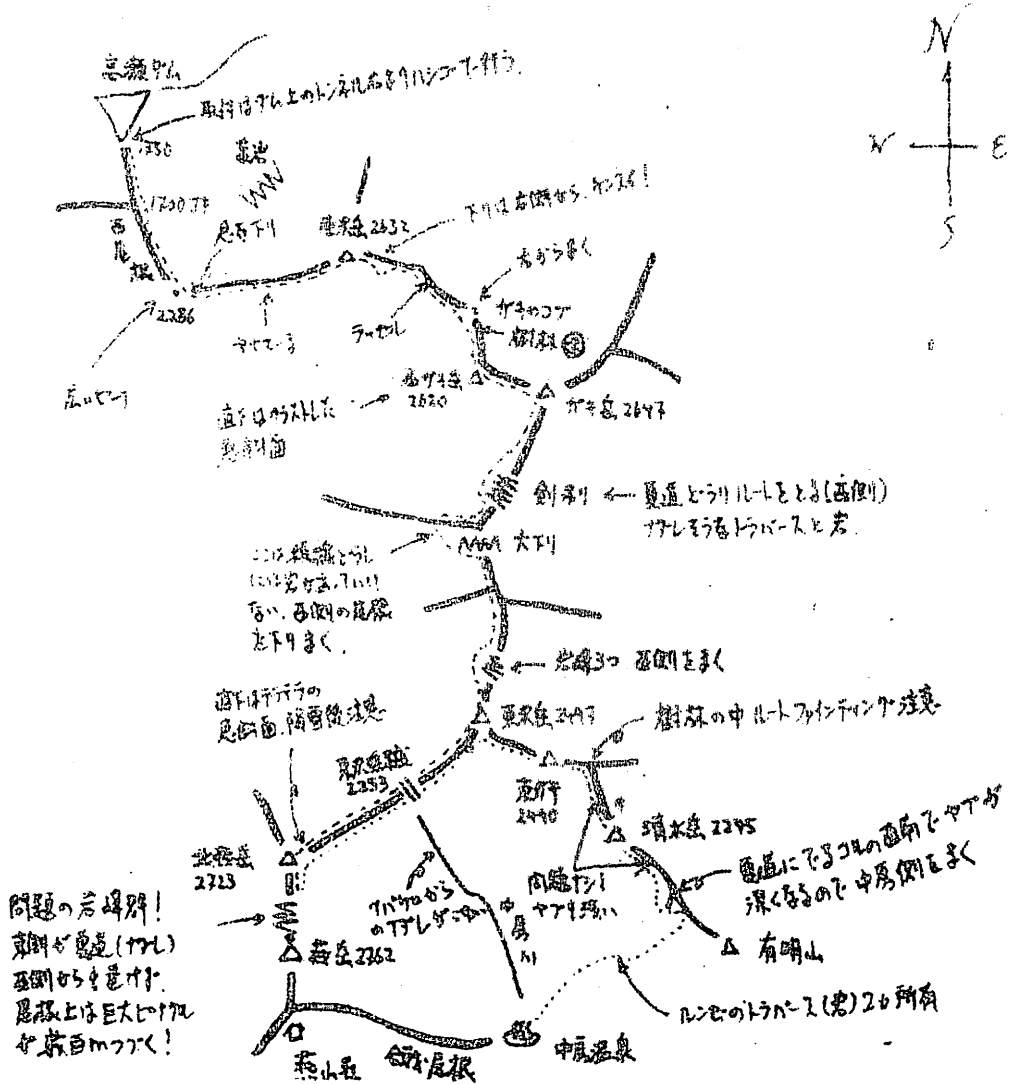
本隊：上浦山、以下8名

7:50: TS発 10:30:唐沢岳 12:00:行動決定、唐沢岳直下をTSとする

冬型の気圧配置が緩み好天に恵まれる。ニセピークから唐沢岳のコルまでの下りは凍せた岩と雪のリッジ(FIX 30m)。登りも傾斜がきつくFIX 5mを張る。唐沢岳頂上まで行くもすっきりとした下り口が得られぬため、本日は先に進むことを断念する(下りは懸垂をしなければならぬ様子)。頂上より少し戻った所のナイフリッジを無理やり切り崩し二張り分のTSを作る。FIX隊は前進の目途をつけてから帰天する。

12月26日 二つ玉低気圧によるフーセツのため沈殿

12月27日 低気圧がぬけ冬型になりフーセツ。沈殿



12月28日 唐沢岳を越え餓鬼岳へ

FIX隊：L浦山、牧野、植垣、河西、長谷川、田尻

— 餓鬼のコブで本隊と合流

本隊：L小久保、以下8名

8:00: TS発(晴れ) - 13:00: 餓鬼のコブ - 14:30: 西餓鬼岳(曇り)

— 15:30: 餓鬼小屋TS

唐沢岳からは岩薮づたいに進むが、最後に岩峰(あまり大きくはない)が立ちほだかり直接越えられないので巻くことになる(岩は風化しており支点がとれない)、左(東)側の斜面は雪崩れそうな急斜面で不可。右のクラストした急なルンゼを50m程下り(FIX30m)、岩壁帯を立ち木を支点に懸垂一回(25m、下部5mはほぼ垂直)。岩壁帯基部のトラバースは雪崩れそうな嫌な斜面(FIX25m)、その後2483mピークまで雪壁とトラバースにFIX75m。2483mピークから餓鬼のコブまでは樹林の中の深く苦しいラッセルとなる。餓鬼のコブは右側から簡単に巻ける。コブからは深い樹林のため見通しがきかずコンパスを頼りに下る。西餓鬼への登りは全員でラッセルを交替しながら進む。一ヶ所雪崩れそうな斜面が出たため雪崩れヒモを着用。樹林帯を抜けるとピークまで100m程カツンカツンにクラストした急な斜面を直上する。西餓鬼のピークからの展望は素晴らしく、裏銀座と大町平野が一望できる。先日の降雪で大町も雪化粧を纏っている。浦山、植垣、河西、長谷川が先行し餓鬼の登りにFIXを張る(トラバース35m)、天気のがずぐずした非常に寒い一日であった。餓鬼小屋の隣にテントを張る。

12月29日 剣吊り突破

FIX隊：L小久保、松下、加藤、兼岩、藤江

7:00: TS発 - 10:30: 夏道の道標 - 12:15: 剣吊り先のコル(一度本隊と合流) 本隊：L浦山、以下9名

7:40: TS発(小雪) - 11:10: 道標(曇り) - 12:15: コル(晴れ)

— 15:30: 2430mコル少し先TSに全員到着(晴れ)

まずルンゼ状の雪壁にFIX75m。空中水平梯子と岩場など滑落の危険のある所にFIXを都合100m。夏道の道標地点(剣吊りの2/3くらいの所)手前の雪崩れそうな斜面のトラバースに75m。そして道標より先のトラバースに75m張ると稜線に戻る。ルートは夏道をたどり剣吊り全体を右側から巻くもので総じてクラストした斜面のトラバースに終始する。今回のルート中最悪と目されていた剣吊りであったが、鏝らしい部分が雪に埋もれていたり、秋の偵察で夏道に赤旗を付けてきたため予想していた程にはてこずらずに済んだ。しかしFIXの終了点で下級生の一人が確保を外した途端にスリップをしたのには肝を冷やされる。

剣吊りを越えその先のコルに降り立つ。コルからの下りは下部が岩壁帯となって切れ落ちており稜線どうしには下降不可能。コルより西に伸びる尾根を200m程下り岩壁帯の基部を大トラバースして稜線まで戻るルートをとる。このトラバースも所々雪崩危険箇所があるのでFIXを都合200m張る。稜線に戻るとすでに時間が押し迫っていたので行動を打ち切る。

12月30日 北燕の稜線へ

FIX隊：L楠垣、河西、橋口 7:05: TS発 - 10:05: 東沢乗越 - 14:15: TS

本隊：L浦山、以下11名

7:50: TS発(晴れ) - 10:20: 東沢乗越(晴れ) - 14:00: 北燕岳下TS(晴れ)

東沢岳は右から巻く。2つ目の岩頭のトラバースにFIX75m。乗越からは樹林帯をラッセルし、ハイマツ交じりのヤセ尾根になる(セツビあり)。大ルンゼを避け左寄りにルートを求めると急峻な尾根になるためFIX75m。そこを抜けるとテラテラの急斜面を100m程で燕の稜線上にでる。ここまできて樹林帯とも別れを告げようやく北アルプスにきた感じである。TSは北燕岳の裏側の棚状地に求める。計画書の行程が既定よりオーバーしているため明日は中房へ下山とする。

12月31日 北燕先にて敗退決定

7:20: TS発(晴れ) - 8:00: 岩峰群手前のコル(晴れ)

- 10:00: ルートを探すも見つからず敗退決定(晴れ) - 11:30: 東沢乗越TS

TSを出るとすぐ岩峰群に突き当たる。僅か数百メートル先には燕岳がそしてそれを登る登山者が見えている。これさえ越せば終わりであるとばかりに上級生部員がルートを求めて散らばる。尾根どうしはピナクル状の岩峰群が乱立し、通過は不可能。夏道は左(東)側の斜面をトラバースしており急斜面の上に表層雪崩の跡を残しこちらも通行不可能。コルから右下に伸びるクラストしたルンゼがあるので、そこを下り右側から岩峰群を巻くことに活路を求める。しかしこれも直ぐに支尾根に突き当たり尾根上に再び戻ることを余儀なくされる(ここまで急傾斜のためコルより伸ばしたFIXは200m)。その後も岩峰群は続き通過は不可能な模様。始めのルンゼをさらに下り岩峰群下の岩壁帯基部を巻くルートも試みるがこれも雪崩れそうな斜面でやはり支尾根が行く手を塞いでいる。

コルにリーダー部員が集合し、この岩峰群の突破は不可能と判断。明日からは天候が確実に崩れる事が天気図から予想されるのでここで敗退とする。残りの食糧が後4日分ということを確認し、エスケープに二通りの案が出される。一つは東沢乗越から中房川を下るもの、そしてもう一つは東鑑鬼より尾根どうしに有明山まで縦走しそこから夏道を使い中房に下るというもの。前者は雪の状態次第であるため、とりあえず

東沢乗越まで往路を引き返すことにする。下りにF I X 50mを張り、東沢乗越に着く。中房川を偵察するが、明日天気が崩れる事を考えると本流自体の雪崩よりも燕園の斜面からの雪崩が恐ろしい。一方有明経由は明瞭でなだらかな尾根をたどるものであり、藪こぎが酷くても雪崩と道に迷う危険性がなく現状で最も安全な退却路と思われる。計画書記載外のルートではあるが無事下山することに主眼を置き東嶺鬼、有明経由で下る事に決定する。

1月1日 有明山登山道 1900m地点まで

7:20: TS発(雪) - 9:00: 東嶺鬼岳(雪) - 11:00: 清水岳(曇り)

- 14:30: 有明山夏道にでる。 - 17:15: 夏道 1900m地点にてビヴァーク

やはり天気は崩れた。テントを撤収していると、中房川を登ってきた横浜勤労者山岳会のパーティー3人と遭遇。我々の今後の行動予定を告げる。そして乗越の道標に行動予定のメモを残して出発する。東嶺鬼から先は樹林帯であるが針葉樹林のため藪は深くない。2280mの屈曲点を高度計とコンパスを頼りに探し、有明山を目指す。夏道の始まるコルの手前はブッシュが酷く、支尾根を一本中房側を巻きこんで夏道に出る。夏道は5mおきくらいにマーキングがある。ここで内田、松下、植垣を先行にだす。ルンゼのトラバースと岩場にF I X 100m。1900m 地点で薄暗くなり、F I X箇所がまた出てきたので行動を中止する。テント一張り分のスペースしか得られなかったため、9人がテントに入り残り6人は3組に別れてツエルトで夜を過ごす。

1月2日 下山

先発隊: L内田、松下、加藤、兼岩

7:05: TS発(雪) - 8:40: 有明荘(雨)

本隊: L浦山、以下10名

7:35: TS発(雪) - 9:15/45: 有明荘(雨) - 12:15: 宮城のゲート

TSからすぐの岩場のトラバース(先日25mすでにF I X)を越えると後は難所は無く中房をめがけてひたすら下る。

係の報告

エッセン

橋口 徹

アレ冬

レーションが重かった。ホックンが入っていたせいだと思う。またレーションを作るとき、にぼし、あめ、チョコなどを買いすぎて冬合宿用にまわしてしまった。α米は一人 0.8袋でよいと思う。

冬合宿

レーションをアレ冬の残りもつかったが、アレ冬と冬合宿で行く人数が違ったため一日分のレーションの質が一定にならない日が2日できてしまった。今回アベックスを持っていくことができなかったが、どこに売っているかもっと調査すべきだった。ドーナツはクリームが入っていて昼飯として適当でないと思う。くずケーキは重いので何日分も持っていけない。焼きソバを 1.5袋/人にしたためその日のダン箱が重くなった可能性がある(レーションが重かったかもしれない) マカホテのピーマンは効果がない、普通の乾燥野菜を入れればよい。今回乾燥野菜の中のタマネギを入れなかったが問題なし。また茶漬けの日は乾燥野菜はなくてもよい。それと茶漬け、雑炊は2人分/人で充分である。予備食の上高地ではなく形がくずれないものに変更すべきだ(コンデンスミルク、ハチミツ、etc)。

装備

藤江 泰一

アレ冬

使用量

ローソク: 0.5本/4本 0.125本/1泊・1天

ガス: 31/91 107cc / 1泊・1人

メタ: 40本/140本 20本/1泊

今回の山行で、予備日を使った場合の計算上の使用量はローソクが 1.25 本、ガスが 7.5l、メタが 100本となりローソク以外は適量でした。短波の入らないラジオ、短い内張りを持っていたのは失敗でした。またスコップはアルミ製だけでなく鉄製も持っていこう。

冬合宿

ガス: 16.5l/25.5l 100cc / 1泊・1人

ローソク: 7本/8本 0.32本/1泊・1天

メタ: 265本/340本 24本/1泊

ローソクは途中で紛失してしまい実際の使用量はわからない。メタ・ガスは適量でした。ツェルトのつもりでフライを持ってしまったので、次回からは準備の際に中をよく点検したい。伊那袋はすぐ破れて雪袋には不適でした。

会計報告

アレ冬

取入	合宿費 1万円×14人 = 14万円	支出	エッセン : 73,844 円
	森さんより 3000円		(1人1日 879円)
	下平さんより 2000円		装備 : 5,105 円
	計 145,000 円		(1人 365円)
			交通費 : 58,490 円
			(1人 4,173円)
			ビール : 3,800 円
			計 140,519円

* 残金 4,481円は松本の部費とする。

* JRを利用するときは回数券を使うと10人分の料金で11枚買えます。

河西 貴史

冬合宿

取入	2万円×15人 + 飛田さんよりカンパ1万円 = 31万円
支出	エッセン 111,699 円 (532円 / 1日・人)
	装備 54,581 円 (3639円 / 人)
	酒 7,380 円
	交通費 57,860 円 (3,857円 / 人)
	食事代 30,000 円
	計 261,520 円

* 残金 : 48,480円、実質残高 : 48,226円、不明金 : -264円

* 一人3千5百円返却 (田尻は-1,127円払) で余り 853円は部費

田尻 英秋

個人の反省

今回の冬合宿は完全な失敗である。理由の根本は熊鬼～燕の稜線をコースに選んだということにある。つまりこの山域が我々の冬合宿には不適格な性質を持つものであるということを見抜けなかったことである。

冬合宿は会の目標であり、全学年のメンバーがそれぞれ出せる力を合わせて取り組める総力戦でなければならない。今回のように1年部員がラッセルでトップに立つことは愚か2年部員にもFixを手伝わせられないほど難所の連続するシビアなルートを選ぶというのは考えさせられる。そして最大の反省点となるのは、絶対あってはならない計画段階での不備が燕山荘直前まできて露呈したことである。確たるエスケープルート手段を持たぬまま突っ込む所まで突っ込んでしまった我々は、北燕の岩峰群が通過不可能と知った時点でただの遭難パーティーに成り下がってしまったのだ。

自分も含め各自計画段階でのミスが、自分達の首を自分達で締めるようなものであることを今回嫌というほど思い知らされたと思う。特に我々の合宿のように大人数で動く山行では、小人数の個人山行とは違いシビアになればなるほど各種の制約が増大することを忘れないでほしい。そして我々の行うべき冬合宿は事前の研究を徹底して行い、天候以外の理由で前進出来ぬような事が無いようにしなければならない。今回はあまりにもお粗末な冬合宿であった半面学ぶことの非常に多い合宿でもあったので各自今後に生かしていくように。

浦山 大介

合宿というのは今回のような山行ではないような気がする。上級生だけが参加するような山行ならば各自が計画を立てて登れば良いと思う。全員で行うならば1・2年も何かを得られるような山行計画を立てて安全登山をしていくべきだろう。

小久保 陽介

今回の合宿の最大の問題点は、計画の甘さであろう。北アルプスとはいえ今回のような山域で合宿を行う場合、さらに偵察を含めた情報を集めて考える必要がある。今回の合宿は合宿としてはいろいろな意味で失敗であったが、この失敗を次回以降に生かしてほしい。ともあれ、我々の冬合宿の形態は、SACのオリジナルであり、システムの完成度も高い。この合宿は学生の特権であり、クラブにおける意味は高いと思う。

内田 健一

合宿をするからには、事前の綿密な地域研究が必要なのは当然なのだけれど、その当然なことをおろそかにしていたということでこの冬合宿は大失敗だったと思う。

牧野 賢一

今回の冬合宿の最も重大なミスは事前の調査があまりにも不足していたことである。例年になく2回の下見にでかけ、それでどうも安心していただろうと松本の裏山であり、街の灯を見ながら歩けるのでまあだいじょうぶであろうとタカをくくっていたのが失敗の原因であったと思う。やはり冬合宿というのは1年間の最大行事であるので不確実な情報はとことん煮詰めてあいまいな部分がないように努めなければならぬと思う。来年はこんなことがないようにしっかりした検討が望まれる。

松下 修也

アレ冬

ラッセルがほとんどできなくて残念だった。遠見尾根にトレースが無かったらおもしろかっただろう。不確実なFIXを張ってしまい、すみません。

冬合宿

・地域研究がなっていなかった。自分としては去年の拵海新道ほどに行今回のルートに入れこんでいなかったこともあるが合宿である以上より完全な計画を立てなければならぬ。他人のアドバイスをうのみにするだけではダメだ

・FIXを張るときもっと2年生をTOPに立たせてやればよかった。

・凍傷になってしまった。靴下はウールがいいのだろうか？

・合宿としては大失敗であるが、自分としては結構楽しかった。テントはどこにでも立つものだ。

植垣 健太郎

中房の林道に到着したときは、やっと終わったというのが正直な気持ちだった。疲労からの解放感というものではなく、ただ全員無事下山できたという安心感によるものである。

今回の合宿で大いに反省すべきことは二点あると思う。ひとつは事前の研究の甘さであり、もうひとつは上級生の精神的なたるみである。合宿にはいる前は入山山域の入念な研究がなされなければならないのだが、燕を夏の感覚でナメていた気がする。例年になく2回も偵察を行い、それ自体は満足のいく成果を得られたが、他の部分でのとりこぼしがいまにも大きかった。今回のルート決定は何本か候補をあげ、一本にしぼってから本格的な地域研究を行ったが、これからはしっかりと地域研究をやったルートのみを候補にあげるべきではないだろうか。あと情報は多方面から集めましょう。気象情報については教養部の星川先生から有効なデータを提供していただけるので、気象係になった人は星川先生のところへかようことをすすめます。

次に上級生の間での意志の統一、伝達に不的確なところがあったことも大いに反省しなければならない。一番まずかったのは雪崩ヒモの取扱いがバラバラになってしまったことだと思う。

自分としては、とても思い出深い合宿となったがパーティー全体を見回す力と、他人の意見を冷静に聞く度量に欠けていた。

河西 貴史

アレ冬は全体を通して特に問題はなかったと思う。個人的にはフィックスをはるときに、場所、支点にもっと気を配るべきであった。問題は冬合宿である。失敗の根本的原因は計画段階でのミスである。未知の山域であるにもかかわらず、燕、常念というよく知った名に目がいて唐沢～燕間も同様に考えてしまった。調査したケンスリ、西尾根はうまく通過したのだから、未知の山域に行く場合は事前の調査が必要であろう。撤退した日が好天だったので引き返すことができたが、あの日が悪天だったら残りのダン箱の数からして危険な状態だったと考えられる。自分自身としては、これまでになくフィックスをはり、危険な状況もあったので、いろいろと勉強になった。ただ撤退以降の気分の転換ができずに下山をあせってしまった。とにかく精神的に疲れた合宿だった。1～3年生は来年以降も冬合宿があるので今回の教訓を十分に生かさなくてはと思う。

加藤 正幸

アレ冬

予定通りトレースできたが、好天と少ない雪に助けられただけのような気がする。形だけのリーダーになってしまったが、シビアな状況になったとき、適格に判断し指示できたかはなほ疑問である。

冬合宿

入山前にやらなければならないことができず、そのつけが入山後に出てしまった。リーダー部員として合宿計画をもう一度CHECKすることは義務であり、あやふやな点があればはっきりさせねばならない。今回はこうしたCHECK機能が、なんとなく流れる楽観的ムードによって働かなかった。リーダー部員、一人一人の自覚の欠如であり、リーダー部員失格である。

山行中は、それなりに動けたと思う。しかし、最後、有明山の下りであせってしまい、余裕をなくしてしまったのは情なかった。シビアになればなるほど落ち着ける度胸をつけなければならない。

計画の甘さがもろに出た合宿であったが、このような綱渡り的な合宿を2度と繰り返してはならない。

兼岩 勲

アレ冬

性格の粗雑な所が出てしまい、細かいミスをしてしまった。リーダー部員である以上、細心の注意をはらって行動せねばならなかった。

冬合宿

今回の合宿の失敗は計画段階においてのあまさによるものであった。ケズリに目がいきすぎていたための思う。またエスケープルートを安易に決定しすぎたと思う。個人的には、もっと自分自身ががんばれたように思う。多少他にまかせすぎてしまった。

長谷川 聡貞

11月のアレ冬合宿は、全く個人的な理由で不参加となってしまう非常に迷惑をかけました。お詫び致します。冬合宿はその様な状況で技術的な確認なしでイキナリ入ってしまって、不安は大いにあったが、とりあえず無事で良かった。しかし2年部員として充分な仕事をこなせたか、と言われるとまだまだである。とりあえず、何でもなくていいところでコケない様にはしよう。また上級生のFixの配慮、張り方、敗退時の配慮とか問題にされてはいるが反面勉強になった。

田尻 英秋

冬合宿の前半は体の調子がよかったが後半はあまりよくなかった。おそらく食べ物がよくなかったのだろう。登高意欲が沈殿によって衰えたからかもしれない。沈殿は朝はうれしいがだんだんうれしくなくなってしまう。やはり沈殿などせずはやく下山したいものだ。燕を越えられなかったとき、死んでも帰りたいと思ったが、やはり命あってのものだねだ。無理をするものではない。しかし有明山からの下山も相当無理なものだったと思う。しかし無事下山できてよかった。

橋口 徹

アレ冬

今回の合宿は天気に恵まれ、人もおおく、トレースぼっちりだったので、ラッセルやルートファインディングを必要とせずなんとなく終わってしまった。しかしガンガンラッセルする方もまだまだであり、Fixの張り方もまだよくわかっていないので冬合宿までにしっかりしたい。

冬合宿

有明山からのエスケープの際にラッセルとルートファインディングを上級生にまかせきりでまったく出来ず、自分の無力を感じた。幸が不幸かいろいろな要素を含む合宿となりためになった。

藤江 泰一

アレ冬

今回もまだまだ体力がたりなかった。そして今回の合宿の反省としては何も知らずに危険地帯で立ち止まってしまったことだ。それは3日目のFix通過の時、通過後に安全地帯にいるようにいわれたのでFixの終りにビナをかけたまま待っていたのだ。しかしそこが雪ビだったのである。このことは自身の無知が原因なのでこれからはもっと積極的に雪山の知識を身につけたい。

冬合宿

個人的な反省としては、身の回りのコマゴマしたことがしっかりできていなかったということだ。クツのヒモやパッキング、ワカンのヒモなどで手間取ったり、何回もやりなおしていた。一つ一つはわずかな時間でもそれが重なると隊の行動に影響するのでしっかりとやりたい。また体調にももう少し気を配りたかった。沈殿の次の日には頭痛のためおくれがちであった。クラブの反省として思い付くのは、最後のテン場をつくる時、もう暗くなりビバークするというのにいまいち能率的に動けなかったと思うことで、非常時にこそもっとテキパキと動くべきだった。僕は一番最初からあの場所にいたので、ああいう時には上級生へも指示を出すくらい積極的に動けばよかったと思う。

笹森 進也

唐沢岳で2日間沈殿したとき、もうこれ以上進めないんじゃないか、もしめたとしても常念岳まで行くのは無理だろうな、という気持ちがおこった。弱気になっていたのがはずかしい。

それから上級生の後をついていだけで地図やコンパスはほとんど見なかった。そのため樹林の中では自分の位置がよくわかっていなかった。

伴野 達也

作文

冬合宿はとても寒かった。特に腰が冷えた。特に腰が冷えた。ハーネスをつけるととても腰が冷えた。風が強い日は風上に背を向けたのでいっそう腰が冷えた。こんなんでも重いキスリグを背負っていたら腰がおかしくなってしまうのではないかと何度か本気で心配した。寝るときもマットが一枚だったせいかととても腰が冷えた。次からはじじーくさいけれどもはらまきのようなものが必要だと思った

伴野 達也

……靴ヒモの災……

僕の目の前で、人が飛んでいった。これは帰省した時の、近くの駅での出来ごと。彼はとてもいそいでいた。乗っていたのは僕と同じ終電の本丸。階段を小走りにかかりおりにいった、のはよいが飛んだのである。そしてコートに手を引っこんでいた僕は見事に体全体で着地。あまりにも悲しい顔をして彼はスゴスゴ逃げ去るよう僕の視界から消えた。僕の観察するに原因はほどけたクツヒモをふんづけてこけこようだった。そして僕はふと先日まで山の中にいた自分を思いうかべた。そう、僕もプラグツのヒモをしょっちゃんほどけた状態にして結び直していたのである。もし僕が彼のようにヒモをふんでこけていたら、場所がやばければ、新聞、テレビをさわがしていたかもしれない。それを思い出すと僕は彼の後ろ姿を見送りながらにが笑いをした。

来年はクツヒモをしっかりと結び、しっかりと足取りで進んでいきたいと思う。

伴野 達也

プレ冬合宿・冬合宿報告書

印刷・発行：信州大学山岳会伊那部会

発行日：1990年1月末日